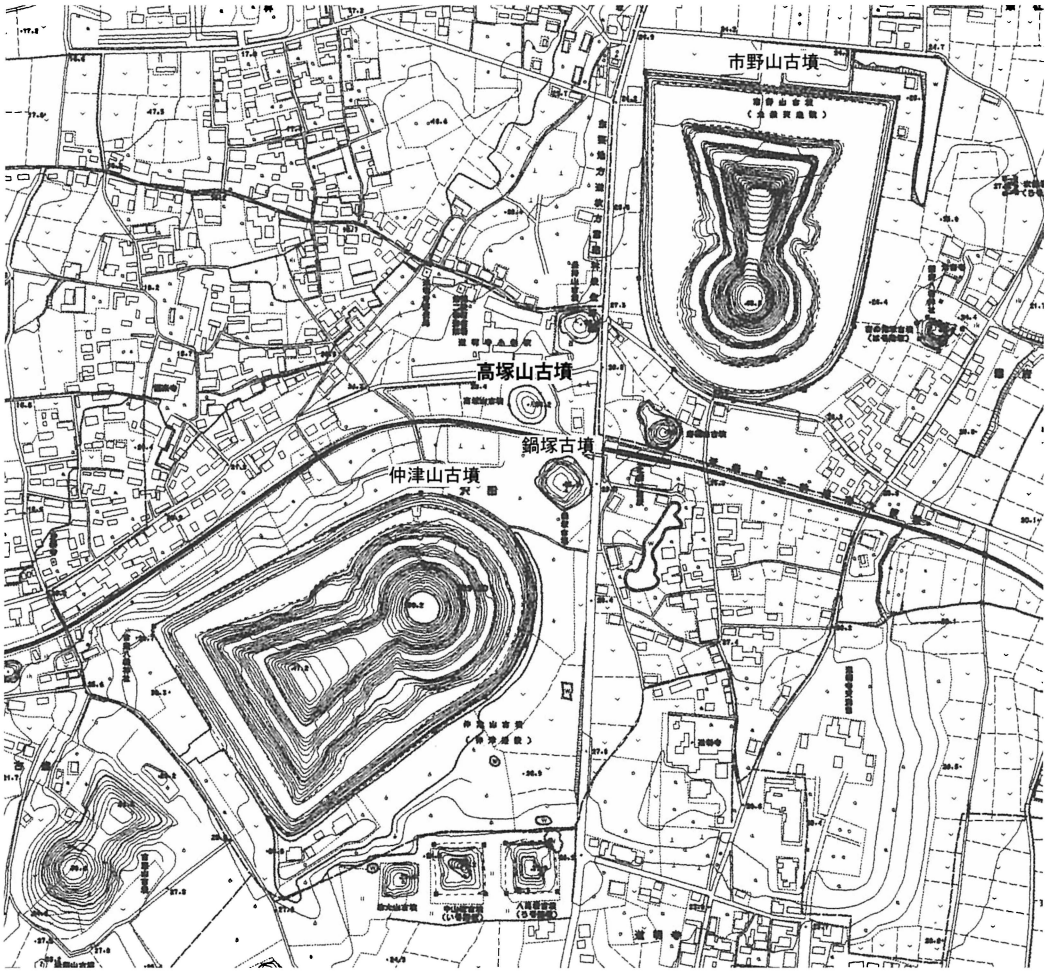
藤井寺市発掘調査概報　第 11 号

高塚山古墳（TTK2010－1 区）



2013 年 2 月

藤井寺市教育委員会

高塚山古墳（TTK2010 － 1 区）

1　位置と既往の調査

高塚山古墳は仲津山古墳後円部の北側、市野山古墳の南西、近鉄南大阪線土師ノ里駅の北西に存在した直径 50m、高さ 8 m の円墳である。

大正 9 年（1920）に起工した天王寺～道明寺間（現近鉄南大阪線）の敷設時に墳丘南端部が切断された。昭和 30 ～ 32 年頃、府道堺大和高田線建設の際、墳頂部主体部の発掘調査を実施し、その後、墳丘部が削平され、現在でも土師ノ里駅古市方面行きのホーム北西部に墳丘の高まりが分かる部分が残っている。

高塚山古墳既応データ

墳　　形	円墳　径50m
内部構造	粘土槨　長さ 7.5m 割竹形木棺　長さ 6.5m
玉　　類	碧玉管玉1、ガラス小玉8
武　　器	刀7、剣7、鉄鏃約400、矛11
農 工 具	鍬19、斧38、鉇1、鑿3、銛4
そ の 他	革楯3

北野耕平『河内野中古墳の研究』1976より作成

主体部は墳丘中央部に東西を主軸とした長さ 7.5 mの粘土槨が見つかり、そこから長さ 6.5 mの割竹形木棺が見つかった。副葬品としては、碧玉製管玉 1 、ガラス小玉 8 、刀 7 、剣 7 、鉄族 400、矛 11、鋤 19、斧 38、鉇 1、鑿 3、銛 4、革盾 3 があり、詳細は不明であるが革盾は粘土廓の上に被覆していたと考えられる。古市古墳群では盾塚古墳で、粘土槨上部を覆うように 11 面の革盾が発見されたが、それに近い特徴であろう。

昭和 60 年には、大阪府教育委員会によって府道堺大和高田線と近鉄南大阪線の間を発掘調査し（府 85 － 6 区）、墳丘南東部で 19 本の円筒埴輪列が見つかった。埴輪列は埴輪が 10 本（約 4m）直線

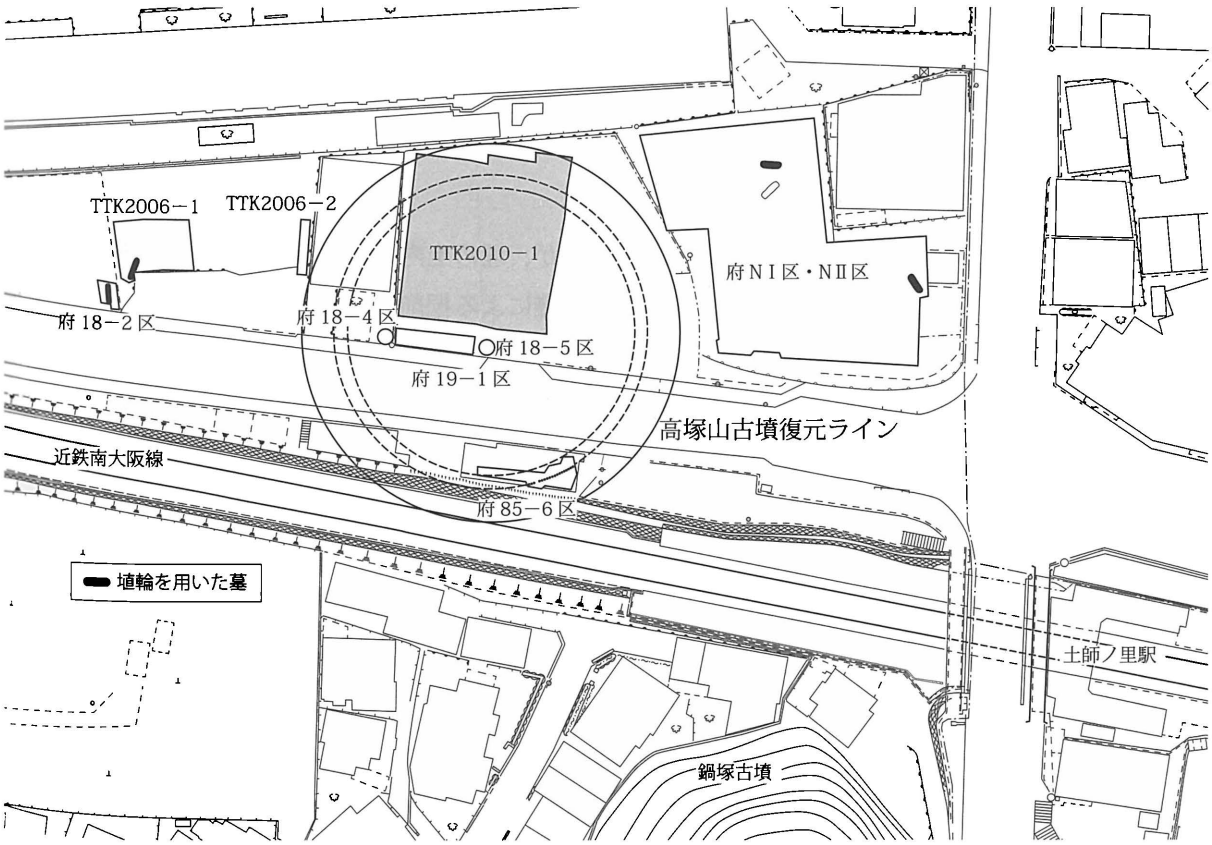


図 1　トレンチ位置図（S ＝ 1：1,000）

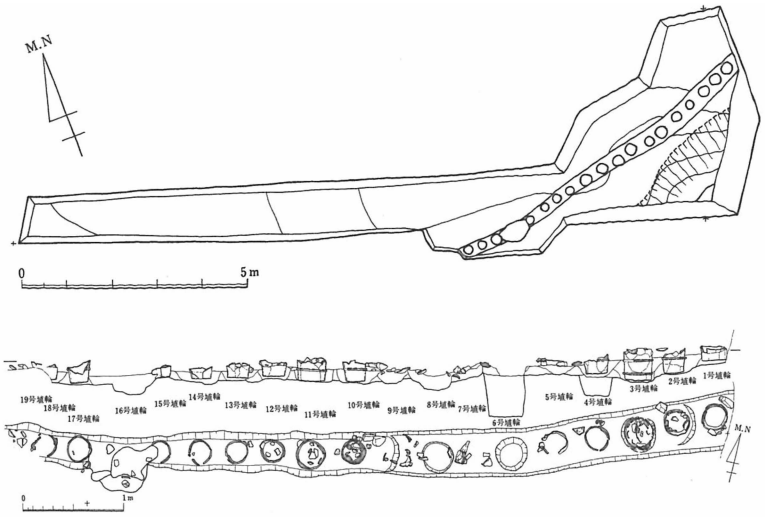


図２　府 85 － 6 区平面・円筒埴輪列検出状況図
［一瀬 1986］

に並んだところで角度をもたせており、直線の複合による多角形状で円弧をなした可能性が高い。埴輪は幅 40 ～ 50㎝で深さ 40㎝前後の溝状の掘方に、芯々間約 40㎝間隔に円筒埴輪が並べられており、突帯の高さをそろえるために、掘方の深さを深く掘っていたものもあった。また、ほとんどは底部を据えていたが、底部を欠いているものもあった。

また平成 19 年には府道堺大和高田線歩道設置工事に伴う発掘調査で（府 91 － 1 区）、墳丘中央部に 2 × 11 mのトレンチを設定し、墳丘盛土を確認した。

2　今回の調査

本調査区は高塚山古墳の北半分にあたり、残存しているとすれば、埴輪列や下段の葺石が検出される可能性のある場所である。もともと駐車場であった敷地に地下車庫付鉄筋建物を建設する計画が上がったため、敷地中央部に幅 2m、長さ 5m のトレンチを設定し、確認調査を実施した。

調査区北側は北に向かって大きく削った後に埋め戻しているが、墳丘部盛土は残存しており、一部葺石の転落石も確認できたため、建設予定地 485㎡の本調査を実施した。

駐車場のアスファルト及び栗石を外すと、墳丘盛土と思われる粘質土と砂礫が全体に現れた。また、調査区北東部では葺石の一部と考えられる川原石の集積と、それに続く埋め土を確認した。調査は北側の落ち込み部と川原石の集積部及び墳丘盛土を中心に調査した。

3　北側落ち込み部

一部葺石の転落石と考えられる川原石も確認できたが、埋め土内にはプラスチックの容器が混入しており、ほとんどが新しい時期の盛り土であった。重機による掘削を実施した結果、下層に埴輪が伴う灰黄色系の土が確認できた。その後、その部分を残すように人力で残土の排除及び精査を行った結果、下部で重機の爪痕を確認し、それは基盤層まで掘削されていることも分かった。上面に残っていた建物基礎の栗石は大ぶりの川原石で明らかに葺石と考えられる。それが大量に使用されており、おそらく故意に葺石を崩して使用したのであろう。

4　葺石の調査

北東部の川原石集積遺構は、上部の礫とにごった土を外していくと規則正しく並んでいる部分が抽出でき、古墳築造時の葺石が残存していることが判明した。

葺石は一部崩れている部分の観察から二重に積んでいることが分かった。まず、内側に基底石（基底石１）を置き、葺石（下部葺石）を施した後、基底 1 の外側に接して基底石（基底石２）を置き、下部葺石に被せて葺石（上部葺石）を施している。最大幅で約 1.2m の残存であるため、上部葺石が

墳丘全体に施されているか、裾部だけか不明である。主軸断面（c ライン）の観察をすると、墳丘盛土［褐色砂礫（14 層）］の上に暗褐色砂礫（40 層）、褐色粘土（35 層）を積みながら、基底石を盛土 14 層に食い込ませるように置き、その上に葺石を施している。さらに 35 層を積んでその上に上部葺石を施している。中央断ち割り部［NS 断面（b ライン）］では、葺石構築土の褐灰色粘土（11 層）や淡褐色細砂（39 層）も認められる。葺石の角度は上部下部ともに約 30 度であった。葺石は円形に造形されているが、1.3 ～ 1.4m の直線が多角形状に列をなしており、その変換点にはやや大きな川原石が用いられている。

基底石は基底石 1 が主に川原石を縦方向に並べているのに対し、基底石 2 は横方向に並べている。また、基底石 1 は東側が 30 ～ 40cmの川原石を用いており、変換点より西側では長軸約 25cm、短軸約 10cmの川原石を用いている。基底石 2 は長径 25cm前後、短径 15cm前後の川原石を整然と並べている。外面観を意識したためと思われる。葺石は小口面が揃うように長軸を斜めにして下から上に積

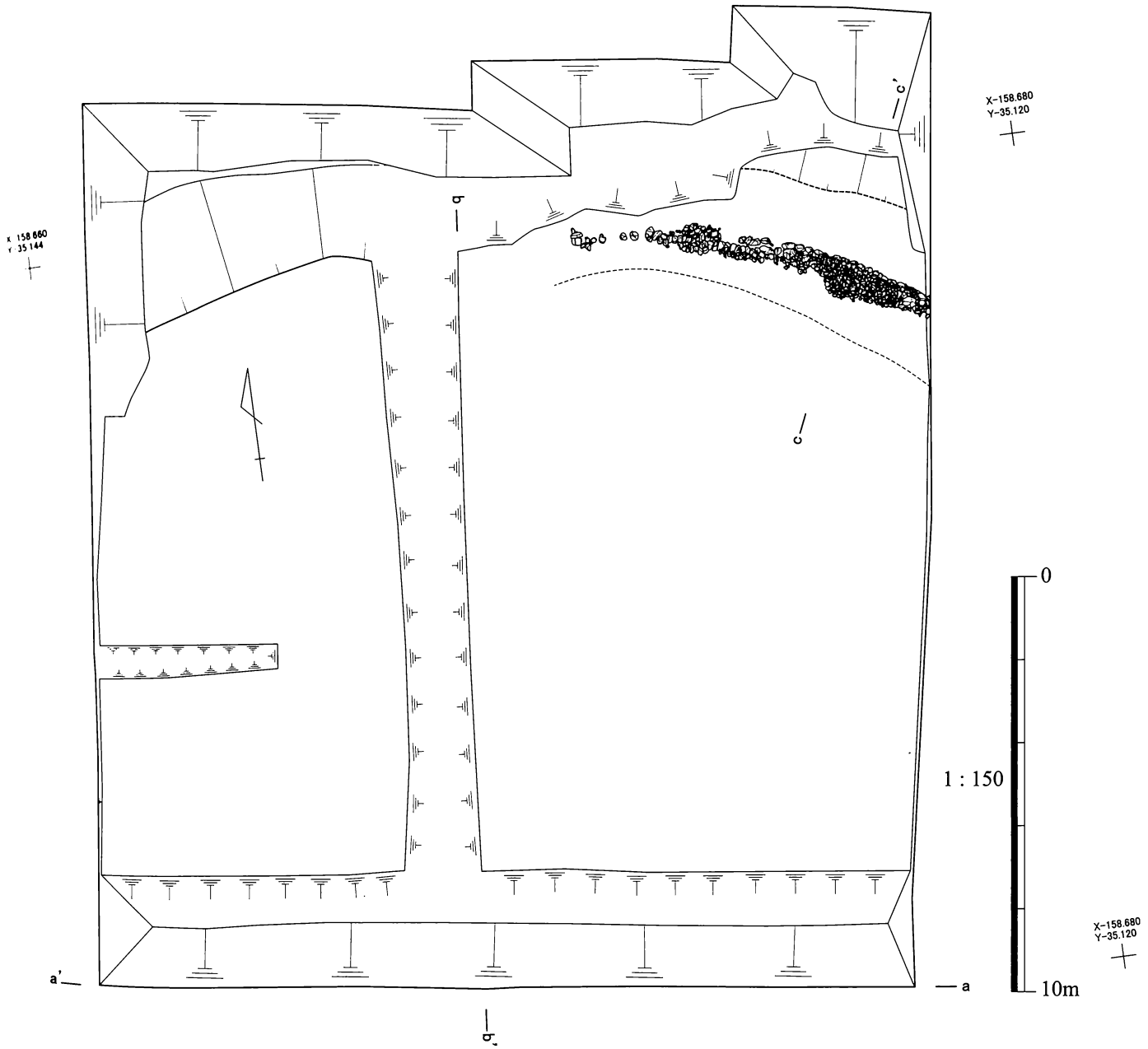


図 3　遺構平面図

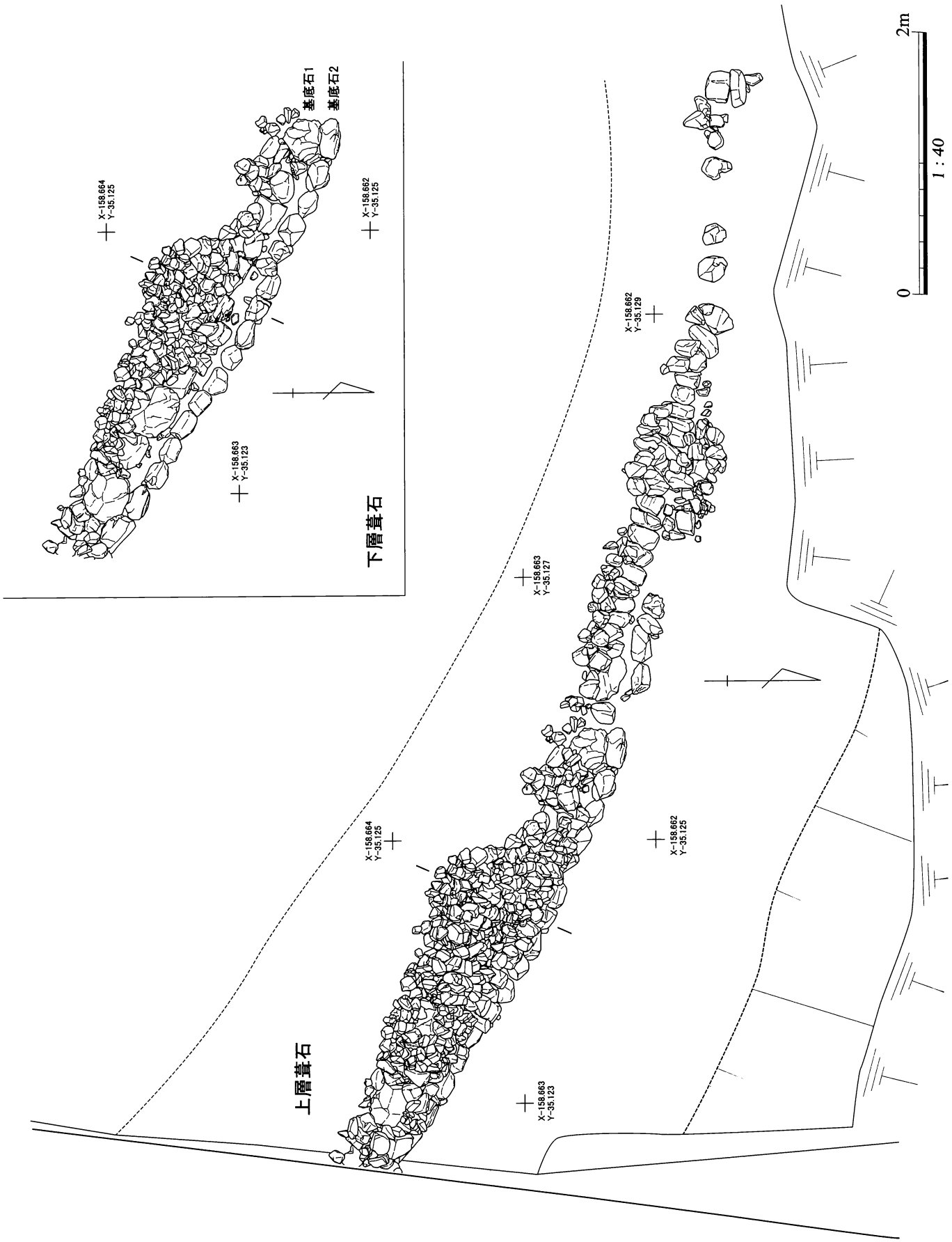

下層葺石
基底石1
基底石2
X-158.664
Y-35.125
X-158.662
Y-35.125
X-158.663
Y-35.123
上層葺石
X-158.664
Y-35.125
X-158.663
Y-35.127
X-158.662
Y-35.129
X-158.662
Y-35.125
X-158.663
Y-35.123
0
1 : 40
2m

図４　葺石出土状況図

んでいる。平面では上下ラインの直線的な作業単位の明示石列は認められず、上部下部ともに三角形を基準とし、その間を埋め込むように積んでいく方法がとられている。この墳丘２段目は、直径 40 m 前後に復元できる。

なお、基底石１の底の高さ（T.P.29.8m）で平坦面を造り、テラスとしている。テラス上には小礫が認められたが、部分的な検出で、テラス全面に敷いていたか否かは不明である。平坦面は最大で幅約 1m 確認できたが、埴輪列は検出できなかった。おそらくすでに削平されたのであろう。

5　墳丘盛土の確認

墳丘の中央部に墳丘盛土を確認するため東西方向と南北方向に断ち割りトレンチを掘削した。東西方向［EW 断面（a ライン）］は調査区南端部で幅 1.2m で長さ 19m を掘削した。南北方向［NS 断面（b ライン）］は確認トレンチを踏襲し、幅 1.6m で長さ 17m を掘削した。

EW 断面　墳丘盛土は、地山面の上に古墳全体に見られる盛土（基盤層）とその上に墳丘中央部のコア部を中心とした盛土（第１段盛土）、さらに砂礫を中心に規則的に積んだ盛土（第２段盛土）の大きく３単位で構成されている。なお、地山は東側 T.P.28.0m、西側で 27.6 m と西に向かって下がっていた。

基盤層は、地山面（褐色砂礫）に粘土系［淡灰色粘土（32 層）、砂混じり灰色粘土（33 層）黄灰色粘質土（34 層）］で高さ 40 ～ 50㎝の盛土を施し、その上に５～ 10㎝の整地［黒灰色粘土（30 層）］を施して古墳の基盤としている。基盤層上面のレベルは T.P.28.4 m であった。

第１段盛土は、トレンチ中央部南寄りに東西方向に基底面 12.4m、上部平坦面 9m、高さ約 70㎝の長い台形を呈するコア部［灰色粘土ブロック（27 層）］を核として、そこから東側には砂礫［褐灰色砂礫（14 層）、褐黄色砂礫（15 層）］、西側には粘土ブロック［橙灰色粘土ブロック（25 層）］を盛土としている。上面のレベルは T.P.29.0m であった。

第２段盛土は、高さ約 80㎝の台形の盛土を基本に、その間に落とし込む方法がとられている。トレンチ内では３箇所の台形盛土（ブロック１～３）と３箇所の間層（落とし込み１～３）が認められる。一番東側のブロック１は黄灰色粘土ブロック混じり黄灰色砂礫（８層）・茶褐色砂礫（９層）・淡茶褐色砂礫（10 層）・明茶褐色砂礫（12 層）・黄灰色砂礫（13 層）で構成され、基部が 6.3m、上部平坦面 3.6m の台形で高さ 1m を測る。ブロック２は茶褐色砂礫（９層）・褐灰色砂礫（14 層）・礫・粘土混じり褐色砂質土（16 層）・明黄橙色砂（17 層）・礫混じり褐色砂質土（19 層）・褐色細砂（20 層）・褐色砂礫混じり灰褐色土（21 層）・灰褐色土（22 層）で構成され、基部が 7.7 m、上部平坦面 1.6 m の台形で高さ 1.1m を測る。ブロック３はトレンチ西端で一部分のみ明灰褐色砂礫（24 層）が確認できた。

落とし込み１は１ブロックの東側の９層が観察できるのみである。落とし込み２は茶褐色砂礫（9 層）・褐灰色粘土（11 層）・褐灰色砂礫（14 層）で構成され上辺４m、下辺 80cm の逆台形で高さは上部がコンクリートで削平されているが残存で 70cm を測る。落とし込み３は西側が確認できていないが橙灰色粘土ブロック混じり褐色砂質土（４層）・茶褐色砂礫（９層）・褐灰色砂礫（14 層）・褐黄色砂礫（15 層）・明褐色砂礫（18 層）・褐灰色砂質土（23 層）他 で構成され、上辺８m 以上、下辺３m の逆台形で高さ 1m を測る。台形の幅が西に行くほど広くなるのはブロックの方向がやや北に傾いているため断面位置によって幅が異なるのであろう。また、葺石斜面での墳丘の断ち割りも行った。

NS 断面・主軸断面　墳丘盛土は基盤までは同じであるが、EW 断面ほど細かくは分層できなかった。墳丘端部の葺石断割断面とともに説明を加える。

基盤層の上、第 1 段盛土、第 2 段盛土、さらに第 3 段盛土が確認できる。また、墳端部には砂層で区画した墳端盛土が認められる。

基盤層は地山面に砂層系の橙灰色砂（48 層）、淡橙灰色砂（49 層）、淡渇色砂（50 層）、マンガン混じり褐灰色砂質土（54 層）、マンガン混じり灰褐色砂質土（59 層）と粘土系の灰黄色粘土（31 層）、淡灰色粘土（32 層）、灰黄色粘質土（34 層）、橙色混じり灰色粘土（51 層）、マンガン混じり褐灰色粘土（52 層）、マンガン混じり褐灰色粘質土（53 層）とを交互に配して 40 ～ 50㎝の盛土を施している。その上に 5 から 10㎝の 30 層で整地を施して基盤としている。上面のレベルは、北側で T.P.28m、南側で T.P.28.5m と北側に下がっている。なお 52 層から土師器細片が出土している。

第 1 段盛土はトレンチ南側に EW 断面でも確認できた高さ約 70㎝のコア部［橙灰色粘土ブロック（25 層）、灰色粘土ブロック（27 層）］を核として、そこから北側には砂礫系の茶褐色砂礫（9 層）、褐灰色砂礫（14 層より礫多い）（46 層）、褐色粗砂（47 層）を盛土としている。上面のレベルは T.P.28.8m であった。

第 2 段盛土は顕著な台形の盛土は認められず、谷部の落とし込みが認められる。

南側に EW 断面でも確認できた落とし込み 2［茶褐色砂礫（9 層）、褐灰色砂礫（14 層）］とその北側に落とし込み 4［茶褐色砂礫（9 層）、灰色粘土ブロック混じり灰褐色砂礫（44 層）、黄褐色粘土ブロック混じり茶褐色砂礫（45 層）］が認められる。

台形盛土は北、つまり墳端に向かって積まれており、南からブロック 4［褐黄色砂礫（15 層）、礫・粘土混じり褐色砂質土（16 層）、暗橙灰色砂礫（60 層）］、ブロック 5［淡褐灰色砂礫（36 層）］である。上面のレベルは南側で T.P.29.9m、北側で T.P.29.3m と北に向かって下がっている。

第 3 段盛土は砂系の褐灰色砂（42 層）、粘土ブロック混じり淡褐灰色砂（43 層）と粘土ブロック系の白灰色粘土ブロック（5 層）、灰黄色粘土ブロック（37 層）に分けられる。

墳丘端部の区画砂層は粘土ブロック混じり褐灰色砂（41 層）、褐灰色砂（42 層）で、葺石断割部では灰褐色粘土ブロック（28 層）、42 層、混じり褐色土（57 層）を幅 10㎝から 50㎝で斜めに積んでいる。

墳丘端部盛土は淡茶褐色砂礫（10 層）、暗褐色砂礫（40 層）で、葺石断割部では、南側と北側の 2 つのブロックに別れる。南側ブロックは茶褐色砂礫（9 層）、褐灰色砂礫（14 層）、灰褐色砂礫（礫多い）（55 層）、粘土ブロック混じり灰褐色砂礫（56 層）、北側ブロックは淡褐灰色砂礫（36 層）、14 層である。

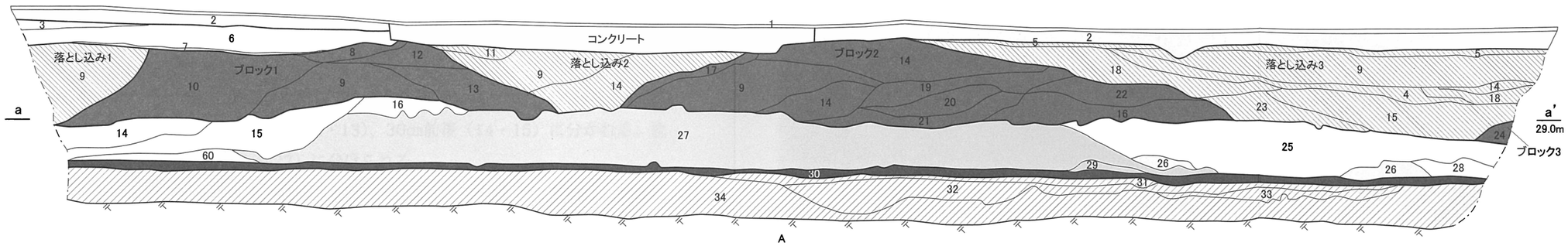
南側ブロック上面には葺石やそのための盛土が認められ、北側ブロックはテラス面の盛土にあたる。なお、葺石断割部では、基盤層の上に第 1 段階土の礫混じり褐灰色粗砂（58 層）を積み、その上に第 2 盛土の灰色粘土ブロック（27 層）の台形盛土（ブロック 6）が認められる。また、落とし込みもしくは上層盛土として粘土ブロック混じり褐灰色砂（41 層）、粘土ブロック混じり灰褐灰色砂礫（56 層）が認められる。

6　出土遺物

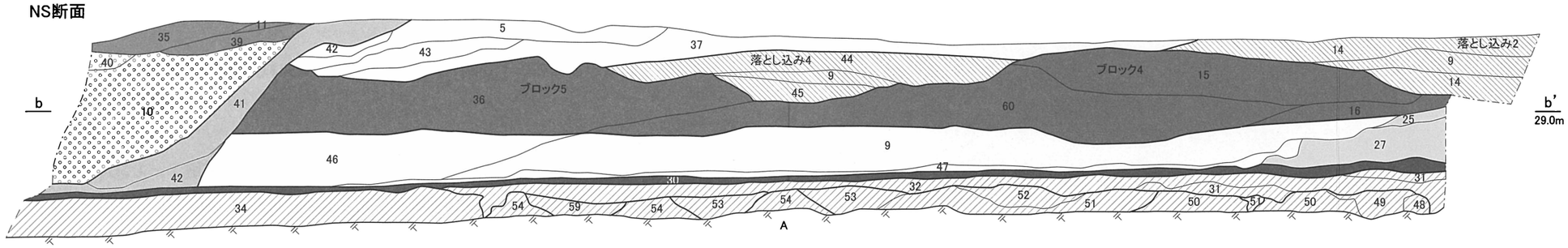
上層から中世遺物や近世遺物が出土したが、その他はほとんどが埴輪であった。

埴輪には円筒埴輪と形象埴輪が認められる。

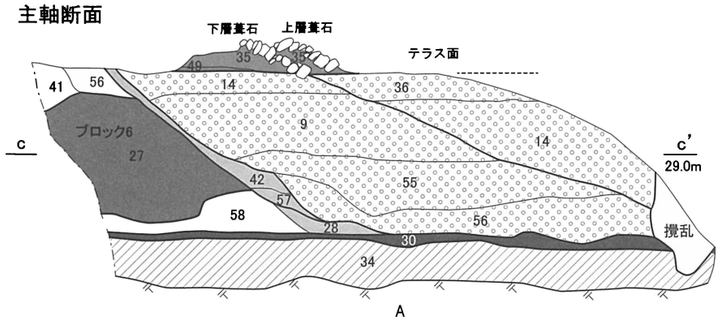
EW断面

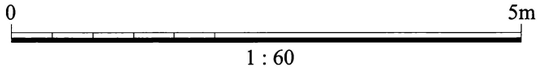


NS断面



主軸断面





1 アスファルト
2 砕石
3 淡黄灰色粘土
4 橙灰色粘土ブロック混じり褐色砂質土
5 白灰色粘土ブロック
6 黄褐色粘土ブロック混じり褐灰色砂礫
7 白黄灰色粘土
8 黄灰色粘土ブロック混じり黄灰色砂礫
9 茶褐色砂礫
10 淡茶褐色砂礫
11 褐灰色粘土
12 明茶褐色砂礫
13 黄褐灰色砂礫
14 褐灰色砂礫
15 褐黄色砂礫
16 礫・粘土混じり褐色砂質土
17 明黄橙色砂
18 明褐色砂礫
19 礫混じり褐色砂質土
20 褐色細砂
21 褐色砂混じり灰褐色土
22 灰褐色土
23 褐灰色砂質土
24 明灰褐色砂礫
25 橙灰色粘土ブロック
26 褐色砂礫
27 灰色粘土ブロック
28 灰褐色粘土ブロック
29 暗灰色粘土
30 黒灰色粘土
31 灰黄色粘土
32 淡灰色粘土
33 砂混じり灰色粘土
34 黄灰色粘質土
35 褐色粘土
36 淡褐灰色砂礫
37 灰黄色粘土ブロック
38 灰黄色粘土ブロック混じり褐灰色砂質土
39 淡褐色細砂
40 暗褐色砂礫
41 粘土ブロック混じり褐灰色砂
42 褐灰色砂
43 粘土ブロック混じり淡褐灰色砂
44 灰色粘土ブロック混じり灰褐色砂礫
45 黄褐色粘土ブロック混じり茶褐色砂礫
46 褐灰色砂礫（14より礫多い）
47 褐色粗砂
48 橙灰色砂
49 淡褐灰色砂
50 淡褐色砂
51 橙色混じり白灰色粘土
52 橙色粘土混じり灰色粘土
53 マンガン混じり褐灰色粘土
54 マンガン混じり褐灰色砂質土
55 灰褐色砂礫（礫多い）
56 粘土ブロック混じり灰褐色砂礫
57 褐色粘土ブロック混じり褐色土
58 礫混じり褐灰色粗砂
59 マンガン混じり灰褐色砂質土
60 暗橙灰色砂礫
A 褐色砂礫（地山）

基盤層
整地度（ブロック）
葺石構築土
区画砂層
第1段盛土コア部
第2段盛土台形盛土
第2段盛土落とし込み
墳丘裾部盛土

図5　断面図

円筒埴輪

法量規格、形態、焼成、外面調整などの特徴の組み合わせから年代を導きだすのがセオリーである。これらを要素別にとらえ、個々の説明を加えながら高塚山古墳出土埴輪の位置付けを考えたい。

［法量］

全体の法量がわかるものはなかった。口縁部径が計測できるのは1個体（4）で、32㎝であった。体部径は突帯部で25㎝前後（8～11）、27㎝前後（12・13）、30㎝前後（14・15）に分かれる。底部径は20㎝前後（16～21）、23㎝前後（22～27）に分けられる。

底部端から第一段タガ上辺までの高さ（以下、底部高と呼ぶ）は同じ古墳のものであれば、底部径が異なってもほぼ同じ値を示す。また、同じ古墳出土埴輪では、数値の幅はあるものの、定説になっている大古墳の年代順に値が低くなっている。

今回の出土例では、底部高は20が13.6㎝、22が13.3㎝と2個体しかわからないが、平均13.5㎝前後である。

器壁については、1㎝以上と以下に分けられるが、今回のものは1㎝以下の薄いものがほとんどで、特に8・10・11・16・22は薄い。

［形態］

口縁部　口縁部の形状によって相対的な年代が考えられる。

逆L字状になっているもの（Ⅰ類）、直立気味に立ち上がり端部を肥厚させるもの（Ⅱ類）、外反して端部に面を持つもの（Ⅲ類）、直立するもの（Ⅳ類）、端部に突帯を付加するもの（Ⅴ類）に分類できる。

なお、Ⅰ類は端部を情報につまみあげ外側に面を持たせるものが古い。Ⅱ類は端部を肥厚させるだけのもの（Ⅱa類）、端部外側に面を持たせるもの（Ⅱb類）に細分できる。Ⅲ類も外反するのみの（Ⅲa類）、外側に面を持つもの（Ⅲb）に細分できる。Ⅰ類やⅡ類、Ⅴ類は突出度が高いほど古い傾向にある。

今回の出土例では、逆L字形のもの（1）、直立気味に立ち上がり端部を肥厚させるもの（2～5）、肥厚させて端部の外側に面を持たせるもの（6）、外反させて外側に面を持たせるもの（7）があった。

突帯　突帯の形状の変化は川西編年でも取り上げられ、時期を決めるメルクマールとされている。それは成形の回数の多いほど古く、高いほど古いというものである。

形態としては、(0) 上辺が伸びる形、(1) 方形、(2) 台形、(3) M字形、(4) 三角形などである。また、第1突帯は (5) 押圧技法で低い方形になっていたり、(6) 断続ナデされていたり、(7) 断続ナデの後押圧を加えるものも認められる。

これに高さを加える。高低は視覚的な基準になってしまうので、器壁より高いもの（高高）、ほぼ同じもの（中高）、低いもの（低高）とする。また、視覚的には同じ高さでも突帯基部が広いほうが低く感じるため、基部が2㎝以上（A）、ほぼ2㎝（B）、2㎝より狭い（C）、1㎝以下（D）とする。

今回出土例では、断面台形で低高のもの（9）、中高のもの（10・13・20・22）、高高のもの（8・12・14）、断面方形で中高のもの（15）、断面半円で中高のもの（11）である。また、12・15のように平坦面に押圧を加えているものもある。突帯の基部が2㎝以上のものは10・15であった。

底部　底部の形態は、直立するもの (1)、外側に開くもの (2)、内彎するもの (3) に分けられるが、外反するもの (4)、直立もしくは内彎した後、外側に開くもの (5) も認められる。

また、端部は外内両方に粘土がはみ出し撥形になったもの（a)、外側に粘土がはみ出たもの（b)、内側に粘土がはみ出たもの（c)、きれいに調整されているもの（d）に細分できる。

今回の出土例では、全体の形態は、外側に開くもの（16・17・19・20・25)、直立するもの（18・22・24・26・27)、内彎するもの（21・23）に分けられる。端部は外内両方に粘土がはみ出して撥形になったもの（16・18)、外側に粘土がはみ出たもの（17・19・22・26)、内側に粘土がはみ出た

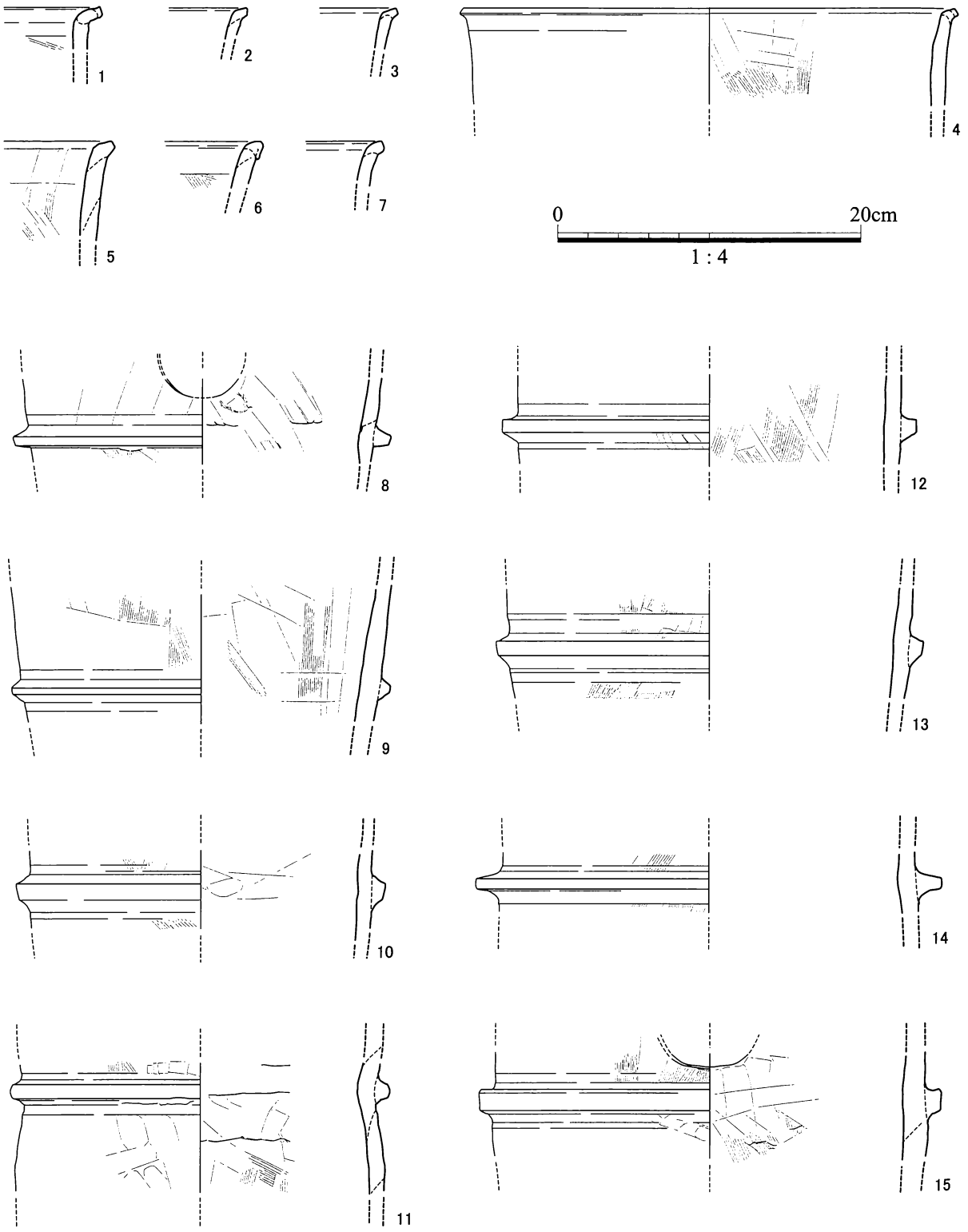


図６　出土円筒埴輪実測図

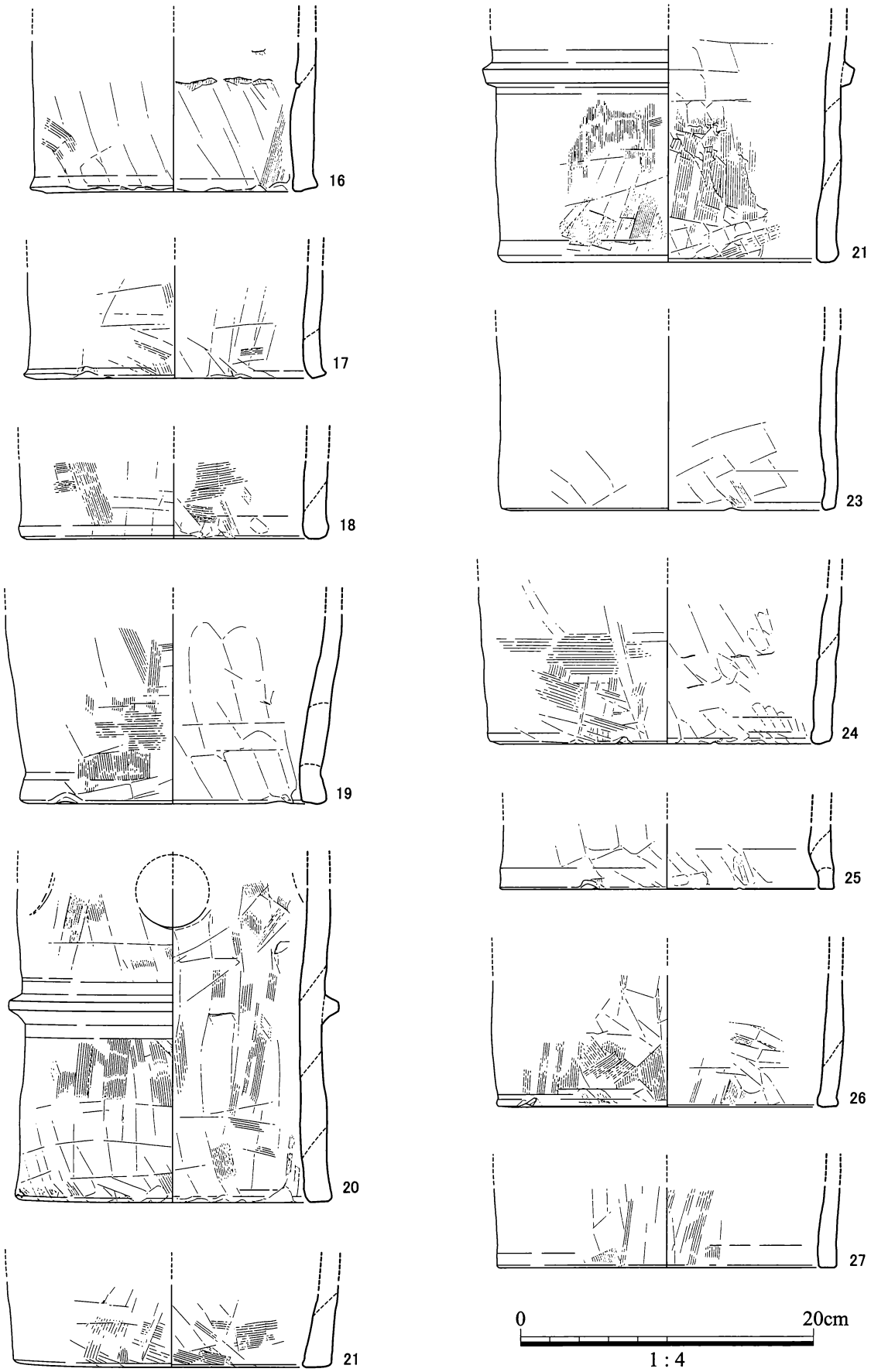


図７　出土円筒埴輪実測図

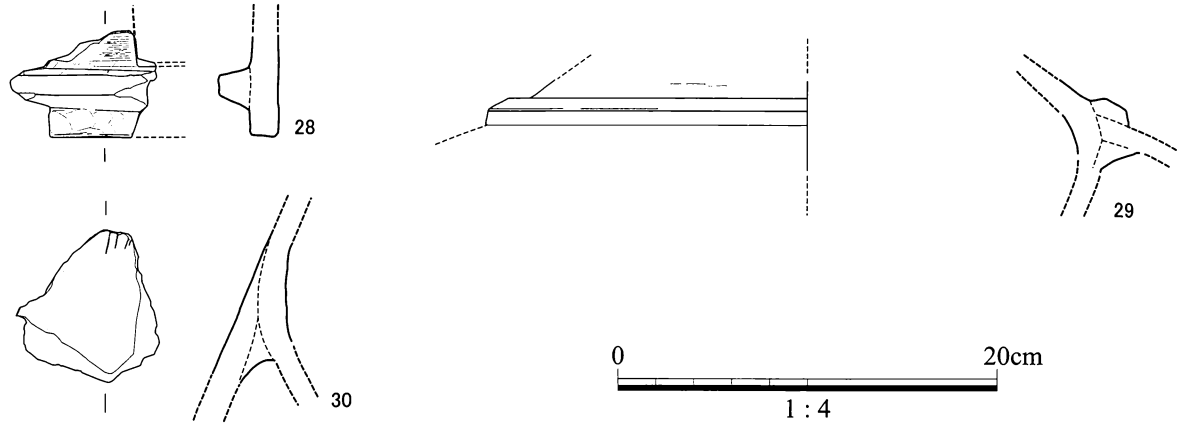


図８　出土埴輪実測図

もの（21・23・24）、きれいに調整されているもの（20・25・27）に分けられる。

透孔　埴輪の起源である特殊器台の巴形や三角形の透孔から派生したもので、古式の埴輪では三角形や逆Ｌ形、方形などがあり、四方向に透孔がある。古墳時代中期前半にはまだ三角形や方形が残っているが二方向の透孔になる。後半になると円形に統一されていく。今回の出土例ではすべてが円形であったが、20 は四方透かしに復元できた。

［外面調整］

体部　外面調整の一次調整は、主にタテハケ、2 次調整はタテハケ、ヨコハケ、ナデなどが認められる。

二次調整のヨコハケについてはＢ種（＝継続）ヨコハケを Ba ～ Bd に細分し、これが時期差を表すことを指摘されている。これは中期古墳の埴輪を細分するには有意義であるが、システマティックに変遷する地域は古市古墳群、百舌鳥古墳群を除くと少ない。他地域でこの細分があてはまるところは大王陵との関連が強いということを現すのであろう。ただ、タテハケ一次調整で終わるものも多く認められ、変化のほとんど無いこの調整では年代の位置付けにはならない。

今回の出土例で外面調整の確認できるものは、ほとんどがヨコハケ二次調整であるが、一部タテハケ一次調整で終わるもの（20）も認められる。

底部　底部に施す調整は、注目されることが少ないが、古墳の発掘調査で円筒埴輪列を検出すると、基底部のみ残存していることが多く、底部による円筒埴輪の変遷が必要である。確かに底部では外面調整が省かれるものが多く、体部の外面調整と同列に扱うわけにはいかないが、それに準拠することは可能であろう。従来、底部端に加える調整については、Ｖ期の要素として「底部調整」と提唱されてきたが、主にⅢ期の円筒埴輪にも底部端内外面にハケ・ナデ・ケズリ等を行って底部の自重による歪みを訂正する技法（底部の調整）が認められる。底部の調整にはナデるもの（ア類）、ヨコハケを施すもの（イ類）、ケズリを施すもの（ウ類）などがある。特に、ア類の中で板ナデを施すものを（アｂ類）、イ類の中でＢ種ヨコハケになっているものを（イｂ類）とする。特に端部外面をなでるものは、全時代を通じて行なわれている。

今回の出土例では、ヨコハケ調整（18・19・21・24）、タテハケ調整（20・22・26・27）、ナデ（16・17・23・25）で、タテハケ調整のものも（20・22・26）がナデ調整も施されていた。
底部の調整については、22 のように端部外面をナデているものは認められるが、顕著に施しているものはなかった。

形象埴輪

形象埴輪は家形埴輪（28)、衣蓋形埴輪（29)、不明（30）が認められる。

家形埴輪は短い基部とねずみ返し部と壁部で、一部入口が認められる。衣蓋形埴輪は笠部の一部である。笠中位突帯と基部の位置が一致する中期的な形態で、線刻は認められない。30 は笠状の破片で甲形埴輪の可能性が考えられる。外面に縦方向の線刻が認められる。

7　まとめ

墳丘部について　高塚山古墳は方墳と考えられていた時期もあるが、大阪府教育委員会の発掘調査(府 85 － 6 区　以下、府調査と明記）で確認した埴輪列の検出で円墳であることが判明した。今回の調査では墳丘 2 段目の葺石が、円形に造形されていることが判明しており、復元すると直径 40m 前後になる。さらにテラスおよび 1 段目葺石を加味すると直径 50m 以上になるであろう。

今回、テラスは最大で 1 m 確認できたが、埴輪列をまったく確認できなかった。また、府調査で見つかった埴輪列から 1 段目斜面までは約 60㎝であることが判明している。円筒埴輪の径を加味すると、テラス面は 2m 以上であると考えられる。ここでは葺石は確認できておらず不確定ではあるが、断面より墳丘斜面が約 25°であったことがわかっている。また、今回の葺石断ち割り部で確認した端部の盛土ラインの角度も約 25°と一致することから、地山面に墳端があると推定すると、２段目基底部より 6.5m 以上大きいことがわかる。このことから高塚山古墳は直径 53m 以上に復元できるが、50 ～ 60 m級の古墳のテラスは 2m 以上になることが多く、墳丘長ももう少し大きくなる可能性が考えられる。

今回、一部ではあるが葺石を二重に施していることが判明した。このような例は、浄元寺山古墳で確認できており、津堂城山古墳でもその可能性を指摘している。浄元寺山古墳では、下層に小振りの川原石を葺き、その上に粘土をのせ大振りの川原石を積んでいた。

今回は検出した葺石は面積が少ないため、部分的でしかないが、上層の葺石がやや大振りである傾向にある。また、下層葺石の基底石は人頭大の巨石や握り拳大の川原石まで見られるが、上層の基底石は長径 25㎝前後、短径 10㎝前後の大きさの川原石にほぼ統一されており、これが続いているとすると視覚的な整美さを表している可能性が考えられる。

墳丘構築法としては、基本的に地山面に高さ 60㎝前後の基盤層を構築し、その上に第 1 段盛土、２段盛土を施していた。１段目盛土は高さ 70㎝前後で、墳丘ほぼ中央部に粘土のコア部を構築し、その周りに盛土を外側に積んでいる。おそらくコア部の上面に主体部の埋葬施設を構築したのであろう。２段目は高さ 80㎝前後で、東西方向に台形の盛土を積んで、その間に土を落とし込むという方法がとられている。

基盤層については、地山である可能性も考えたが粘土層から遺物が出土しており、包含層もしくは盛土であることと判断した。基盤層の上の黒灰色粘土を旧耕土と考えることもできるが、NS 断面にみられる砂質土系と粘土系が互層になっている点から墳丘築造前の基盤層として構築したものと理解したい。黒灰色土は基盤層構築と墳丘構築にタイムラグがあったためと想定したい。

出土埴輪について　高塚山古墳の埴輪について、府調査出土埴輪を含めて位置付けを考えたい。

全体的に古式の形態をもつものが目立つ。形態全貌がわかるものはないが、口縁部、底部、突帯等が認められる。

口縁部は９個体中、逆Ｌ字形１個体、直立気味に立ち上がり端部を肥厚させるもの５固体、外反して端部に面を持つもの１個体、外反させて外側に面を持たせるもの１個体、直立気味のもの１個体であった。口縁部径は３個体ですべて 30㎝前後であった。

突帯の形態は、25 個体中、断面台形で低高のもの６個体、中高のもの８個体、高高のもの３個体、断面方形で高高のもの１個体、中高のもの３個体、低高のもの１個体、断面Ｍ字形で低高もの１個体、中高のもの１個体、断面半円で中高のもの１個体である。高さでは、高高のもの４個体、中高のもの 13 個体、低高もの８個体である。突帯も比較的高く、古式の形態のものが多い。断面Ｍ字形のものが少ないのも特徴であろう。

突帯基部が 2㎝以上のものは３個体で、そのうち、上面を平らな工具で押し付けるものも確認できた。突帯の押圧は後期古墳の埴輪の指標のひとつにされているが、大山古墳や野中古墳など古墳時代中期中葉には認められ、さらに盾塚古墳など古墳時代中期前半の埴輪にも確認できるものが存在する。おそらくこれは最終のナデ調整を省略したものと理解できるであろう。

突帯間隔は計測できるものは１個体と少ないが、12㎝であった。

体部径は突帯部で、25㎝前後が４個体、27㎝前後が４個体、30㎝前後が２個体であった。

底部の形態は、直立するもの、外側に開くもの、内彎するものがほぼ同程度認められる。底部高は 15 個体中、平均 13.5㎝であった。底部径は 20㎝前後が 15 個体、23㎝前後が８個体、25㎝前後が３個体で、ほとんどが小型品であるが、中型品も含まれる。

器壁は 1㎝以下の薄いものが多い。

透孔はすべて円形でほとんどが二方透かしであったが、四方に復元できるものも存在する。ただ、そのうちの１ヶ所の透孔は径が小さく、副次的穿孔と呼ばれるものかもしれない。

20 はタテハケ一次調整で終わっており、二次調整のヨコハケの省略と考えられるが、四方透かしに復元でき、古式の埴輪の名残りである可能性を指摘しておきたい。突帯間隔も透孔の位置から推測すると 13㎝以上であることがわかる。

外面調整は、ヨコハケ２次調整がほとんどであるが、タテハケ一次調整のものも少量認められる。ヨコハケ調整には断続的なＢ種ヨコハケが認められ、体部全体が判明した例は少ないが、Bb 種ヨコハケと考えられる。

底部外面調整は確認できるもの 26 個体中、ヨコハケ調整７個体、タテハケ調整 12 個体、ナデ調整７個体であった。底部の調整は顕著なものは見られなかった。なお、底部外面調整にナデ調整のものが一定量含まれるが、仲津山古墳堤出土の円筒埴輪に近い特徴をしており、ほぼ同時期の所産と考えたい。

これらの特徴から、高塚山古墳の円筒埴輪は、底部径 20㎝前後の小型品を中心に 25㎝前後の中型品も少量含まれる。底部高は 13.5㎝前後、突帯間隔は 12㎝前後であることがわかった。四方透孔の存在や器壁の薄いものが多いこと、突帯に高い台形のものが多いなど古式の要素も認められるが、Ｂ種底部外面にナデ調整が多く認められること、透孔が円形であること、突帯に基部幅が 2㎝を超えるものがあるなど新しい要素が認められる。

では、同時期と考えられる古墳の出土埴輪と比較するとどうであろうか。

仲津山古墳は墳丘長 290 ｍの前方後円墳でわが国９位、古市古墳群では誉田御廟山古墳に次ぐ大きさである。内部は宮内庁の管轄であるため立ち入りさえできないが、前方部および後円部堤で円筒

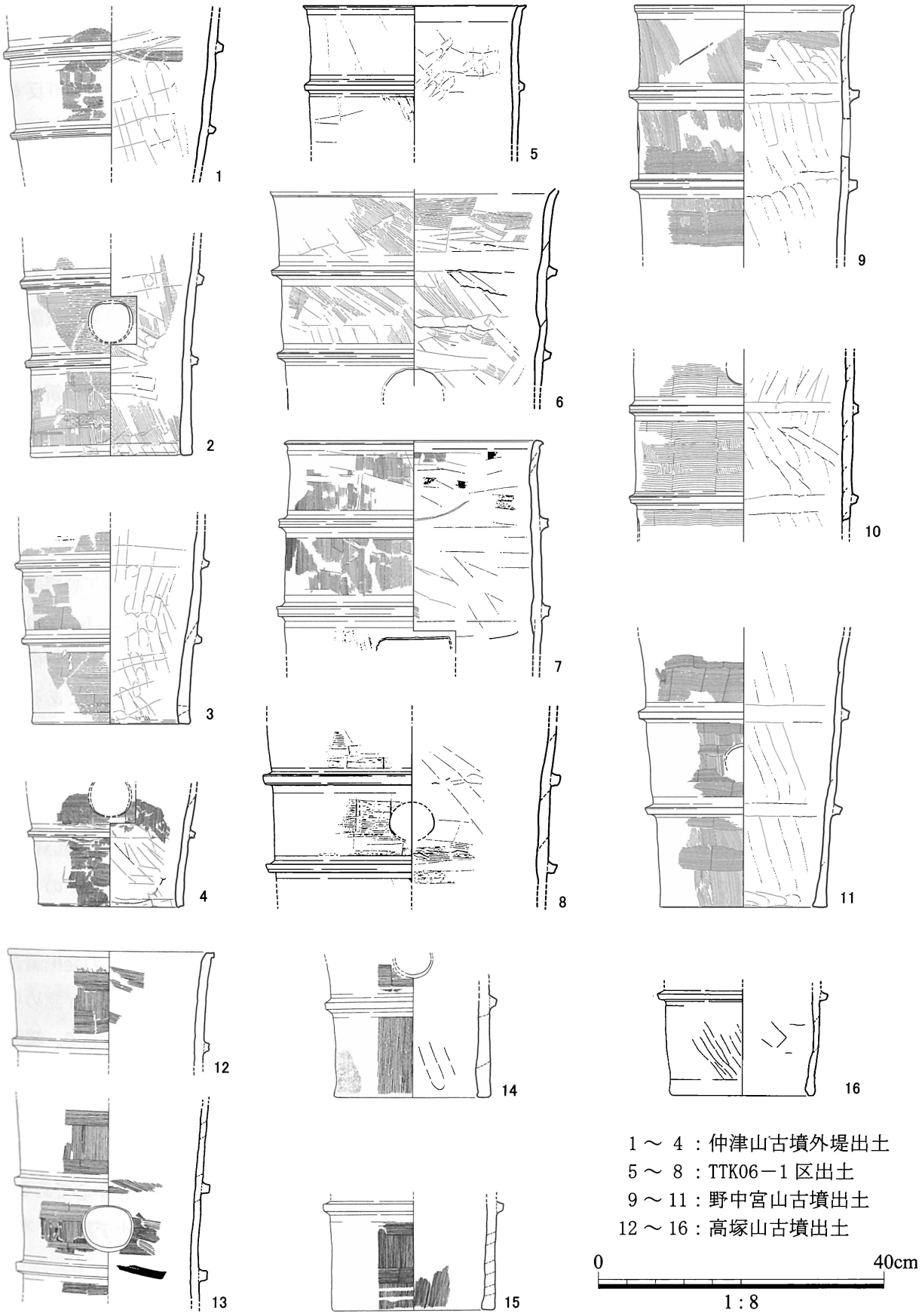


図 8　埴輪実測図

［1・2・4：上田 2012a、3：山田 2012、5～8：上田 2012b、9～11：川村 2011、12～16：一瀬 1986］

埴輪列が確認されている。これらはほとんどが底部径 25cm 前後の中型品で一部大型品が認められる。ほとんどが普通円筒埴輪であるが、この中には朝顔形円筒埴輪が含まれることがわかっている。約 10 本に 1 本、径がやや大きなものが含まれる。口縁部の形態がわかる資料は少ないが、やや外反するするものや、口縁端部を肥厚させ、外側に面を持たせるものなどが認められる。突帯間隔は平均で約 12cm、底部高は平均で約 13.5cm である。一部 15cm 前後や、18cm 前後、21cm 前後の底部高が高いものも認められる。突帯は断面方形や台形が中心で、M字形のものも認められる。中高から高いものが中心であるが、低いものも認められる。透孔は円形が中心であるが、逆三角形のものも少量認められる。外面調整は体部のほとんどに B 種ヨコハケ調整が認められ、少量タテハケ一時調整のものが確認できる程度である。底部外面調整は 118 本中、ヨコハケ調整のもの 58 本、タテハケ一次調整のもの 60 本とほぼ拮抗している。これらの埴輪の特徴はⅢ期 2 段階のメルクマールとなっている。

高塚山古墳西側（TTK06 － 1 区）で見つかった埴輪槨に用いられた円筒埴輪は、1 点時期の新しいものが含まれていたが、他はⅢ期の特徴をもつもので、Ⅲ期でも古い特徴を持つものも見られる。底部を確認できるものはないが、ほとんどが大型品で、突帯間隔は平均で 12.4cm である。口縁部は外反させるものが多く、端部を肥厚させ面を持たせるものや、逆 L 字形でやや受口形のものも認められる。器壁は薄く、突帯は断面台形で突出したものばかりで、一部上辺をつまみあげるものも認められる。透孔は円形や半円形のものが認められる。外面調整は体部が判明している 7 本中、ヨコハケ調整のもの 5 本、タテハケ調整 2 本である。ヨコハケ調整は静止痕の認められないものや Bb 種ヨコハケのもので、タテハケ調整のものも斜め方向になるなど丁寧に施している。これらにはⅢ期 1 段階の特徴を持つものが含まれ、仲津山古墳の墳丘部に使用された埴輪か鍋塚古墳の埴輪を使用したものである可能性が考えられる。

鍋塚古墳は最近の調査で一辺 63m の大方墳で、仲津山古墳後円部堤にやや重複して築造されている可能性が指摘されているが、埴輪の出土量が少なく情報もあまりない。円筒埴輪では、小型のものと大型のものとが報告されており、突帯は基部の狭い断面台形で中高のものである。器壁が薄いものが多く、1 点の資料ではあるが底部高は 12cm を測る。外面調整はヨコハケのものやタテハケのものが存在する。

野中宮山古墳は墳丘長 157 mの前方後円墳で平成 16 年に墳丘北側の埴輪列及び後円部の発掘調査を実施し、円筒埴輪列を確認できた。ほとんどが底部径 20cm 前後の小型品で、一部中型品が認められる。また、埴輪列のものではないが大型品も認められる。口縁部は外反させるものが中心で、端部を肥厚させ外側に面を持たせるものも認められ、さらに直立するものも認められる。突帯間隔は 13 個対中平均で 12.5cm、底部高は 31 個対中平均で 14.5cm である。突帯は断面台形やM字形で中高のものが中心であるが、高いものや低いものも認められる。外面調整は体部のほとんどがヨコハケ調整で、少量タテハケ一次調整のものが確認できる。ヨコハケ調整のものは Bb 種ヨコハケが中心である。底部外面調整は 33 本中、ヨコハケ調整のもの 17 本、タテハケ一次調整のもの 10 本、ナデ調整 2 本、不明 4 本である。

これらⅢ期の埴輪群は、大王墓の埴輪と独立墳や陪塚の埴輪であり、これらを同等に比較してよいかわからないが、高塚山古墳のものは仲津山古墳堤部の埴輪列に近く、野中宮山古墳墳丘部埴輪列の埴輪は、仲津山古墳堤部のものより底部高も突帯間隔も数値が高いことがわかる。また、高塚山古墳西側で見つかった埴輪槨に使用された円筒埴輪は、底部は確認できていないが、古い特徴を持ち仲津

山古墳墳丘部の埴輪と考えた。数値や調整法から見ると、野中宮山古墳墳丘部の埴輪に近い。また、津堂城山古墳所要の円筒埴輪に近いものも存在する。

これらのことから推定すると、仲津山古墳の墳丘部と堤部では所用埴輪の様相が異なることから築造時期に差があると考えられる。つまり、仲津山古墳墳丘部の築造は、津堂城山古墳築造時期とやや重複し、墳丘部築造時に野中宮山古墳や鍋塚古墳が築造される。また、高塚山古墳は仲津山古墳堤部と同時期かやや下って築造されたと考えられる。

高塚山古墳は位置関係などより、仲津山古墳の陪塚からはずすという考え方もある。しかし、同時期で近接することから、鍋塚古墳とともに仲津山古墳の付属古墳と考えたほうが良いであろう。方墳である鍋塚古墳が堤と接するのに対し、円墳である高塚山古墳は堤の外に配置されていることから、この時期、主墳の前方後円墳と付属古墳との関係は円墳より方墳が優位であった可能性を指摘したい。

（上田）

≪参考文献≫
一瀬和夫 1986「林 85 － 6 区」『昭和 60 年度　国庫遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
一瀬和夫 1988「古市古墳群における埴輪群の変遷－大型古墳を中心として－」『究班（埋蔵文化財研究 15 周年記念論文集）』
一瀬和夫・十河良和・河内一浩 2008「古市・百舌鳥古墳群の埴輪」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』白石太一郎編　奈良大学文学部文化財学科
上田　睦 2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第 5 号　埴輪検討会
上田　睦 2012a「仲津山古墳 NTK93 － 2 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXⅦ　藤井寺市教育委員会
上田　睦 2012b「高塚山古墳 TTK06 － 1・2 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXⅦ　藤井寺市教育委員会
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2　後『古墳時代政治史序説』1988 に改変転載
川村和子 2011「野中宮山古墳 04 － 1 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXⅥ　藤井寺市教育委員会
北野耕平 1976『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室
小栗明彦 2007「蓋形埴輪論総論」『埴輪論考 1　円筒埴輪を読み解く』1　大阪大谷大学博物館
小山田宏 2009『林遺跡　国府遺跡　土師の里遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2008-4　大阪府教育委員会
宮本長二郎 1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
山田幸弘 2012「仲津山古墳 NTK03 － 1 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXⅦ　藤井寺市教育委員会

※表紙の図面は［2005 年度科学研究補助金（研究代表者白石太一郎）による研究成果「都市化以前の古市古墳群付近地形図（米軍が 1946 年に撮影した航空写真より作成）］より一部改変

例　言

1　本書は、事務所建設に伴い2010年度に実施した、高塚山古墳（TTK2010－1区）発掘調査の概要報告書である。調査地は、藤井寺市沢田3丁目351-1に所在する。
2　調査は、申請者の依頼を受け、藤井寺市教育委員会事務局教育部文化財保護課が実施した。期間は、現地調査（外業）2011年1月27日～4月28日、整理作業（内業）2011年7月5日～29日である。
3　調査及び本書の作成は、上田睦、今荘ひとみ、尾﨑理枝、寺﨑理恵が行なった。
4　遺構写真の撮影は上田が行い、遺物写真は有限会社阿南写真工房にお願いした。
5　図面の方位は、特に断りのない限り座標北を使用した。標高はT.P.を用いた。トレンチ位置図は、上を座標北とした。
6　調査時には独立行政法人奈良文化財研究所青木敬氏、廣瀬覚氏、羽曳野市教育委員会河内一浩氏の協力を得た。

報告書抄録

ふりがな	たかつかやまこふん
書　　名	高塚山古墳
副 書 名	TTK2010－1区
シリーズ名	藤井寺市発掘調査概報
シリーズ番号	第11号
編集機関	藤井寺市教育委員会
所 在 地	〒583-8583　大阪府藤井寺市岡1丁目1番1号　TEL 072-939-1111㈹
発行年月日	西暦2013年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかつかやまこふん 高塚山古墳	おおさかふ 大阪府 ふじいでらし 藤井寺市 沢田	27226	51	34°34′20″	135°36′52″	現地調査（外業） 2011年1月27日 ～4月28日 整理作業（内業） 2011年7月5日 ～29日	485	事務所建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高塚山古墳	古墳	古墳	葺石	円筒埴輪	

藤井寺市発掘調査概報　第11号

高塚山古墳（TTK2010－1区）

発　行　日　2013年2月28日
編集・発行　藤井寺市教育委員会事務局
藤井寺市岡1丁目1番1号
TEL（072）939-1111㈹
印　　刷　株式会社近畿印刷センター
柏原市本郷5丁目6番25号

図版一

調査区全景（西より）

葺石出土状況（東より）

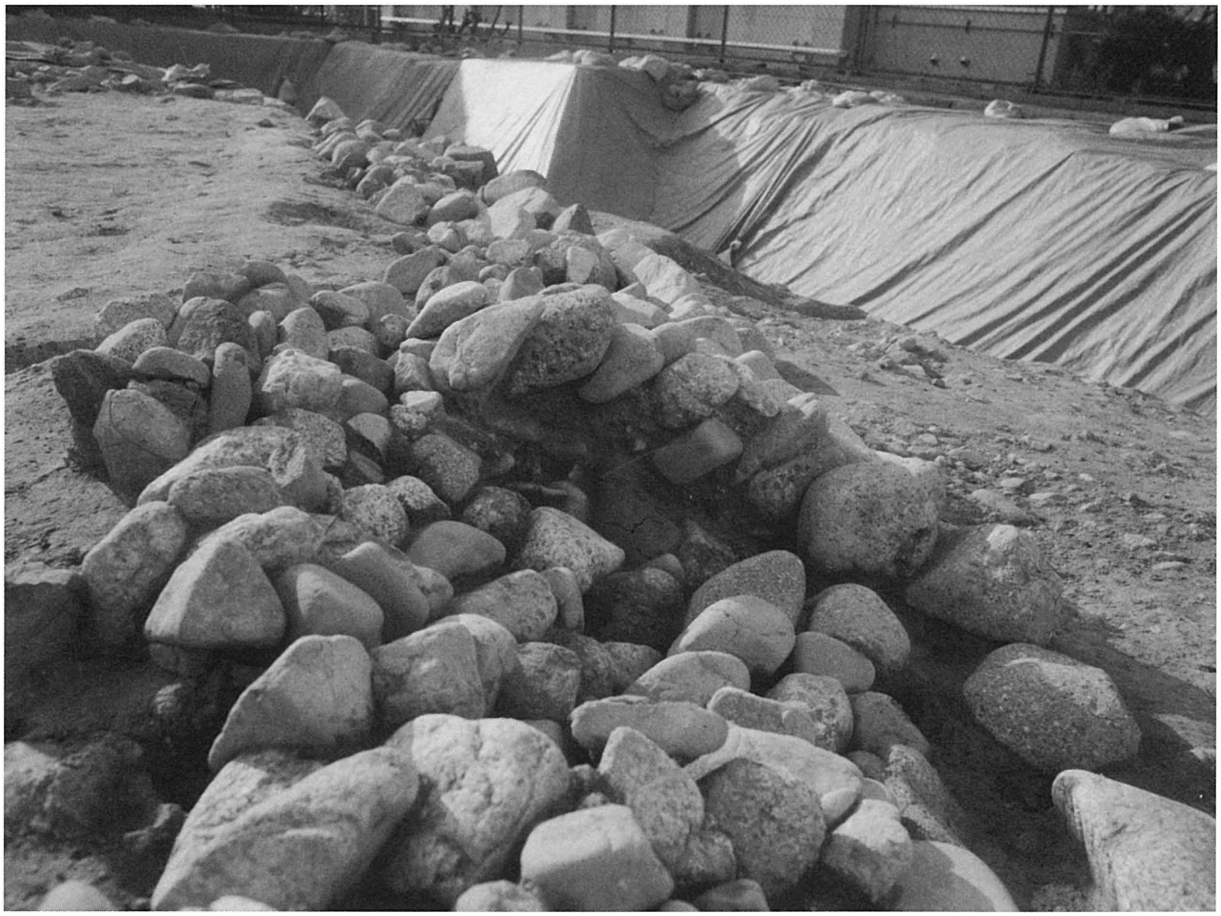
図版二

調査区全景（北より）

葺石検出状況（北より）

図版三

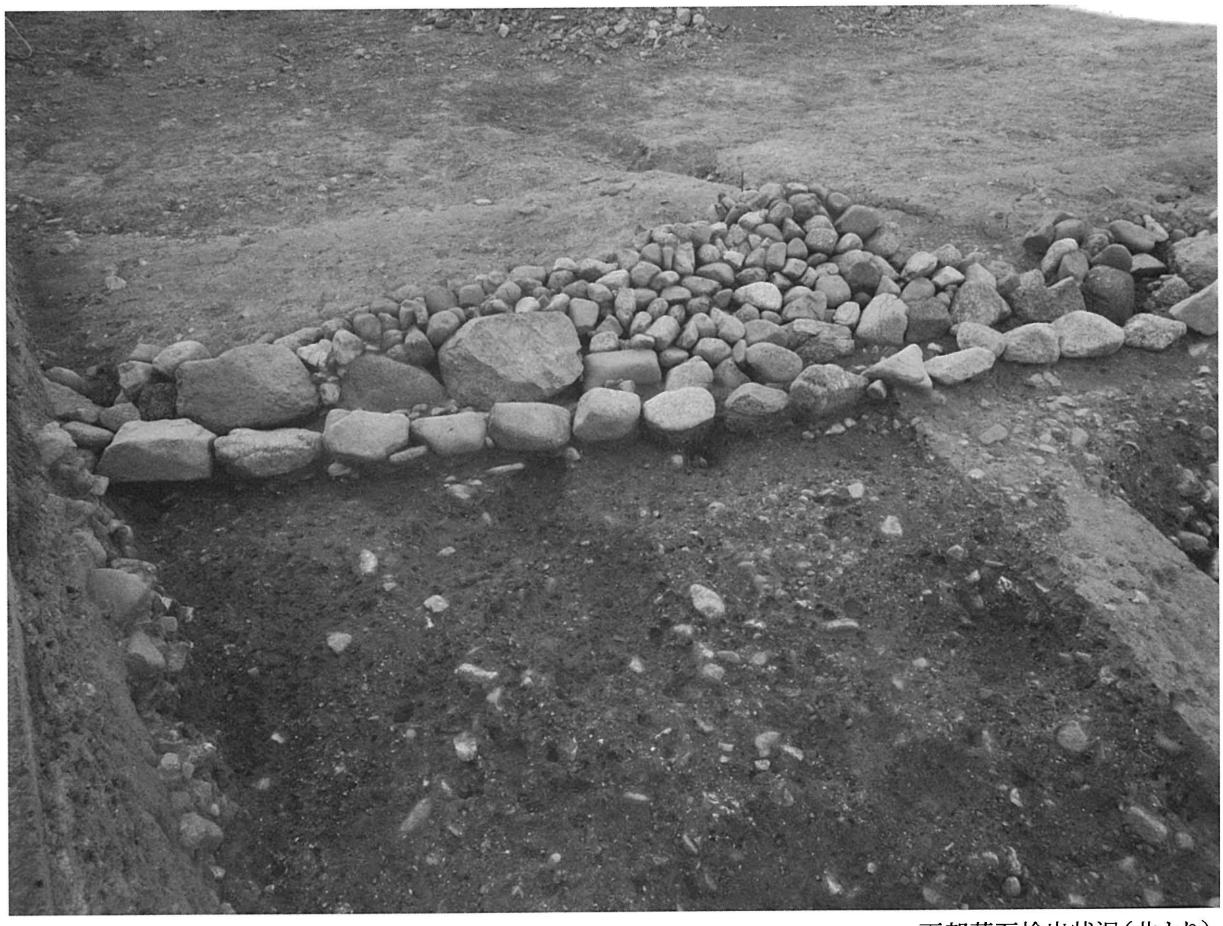
上部葺石（北より）



上部葺石断面（東より）

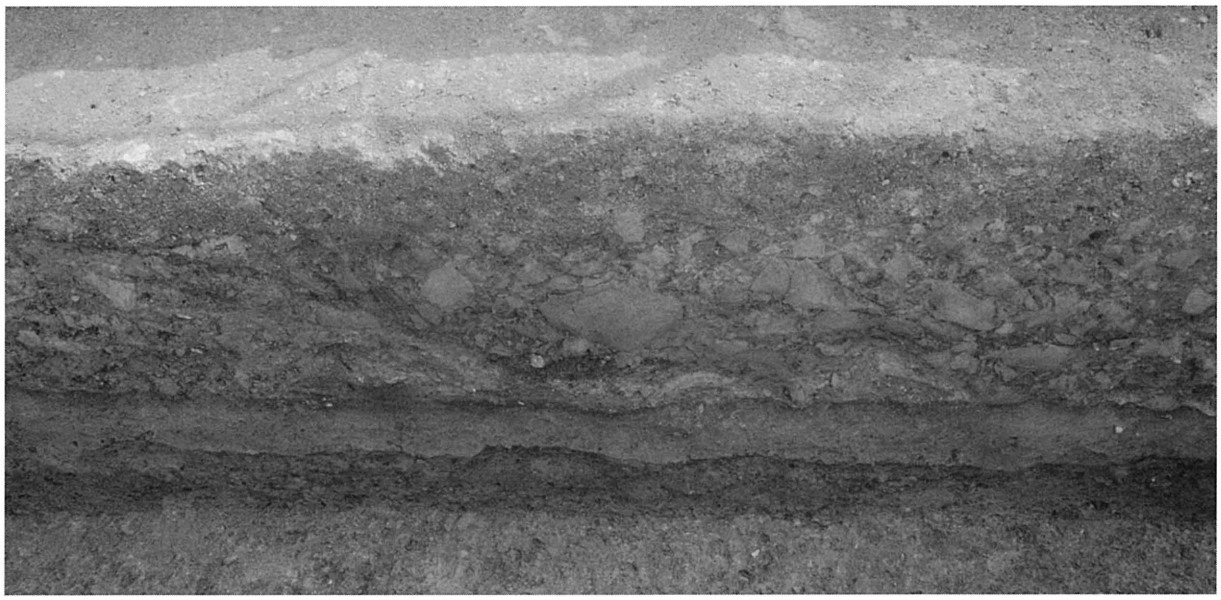
図版四

下部葺石検出状況（北東より）

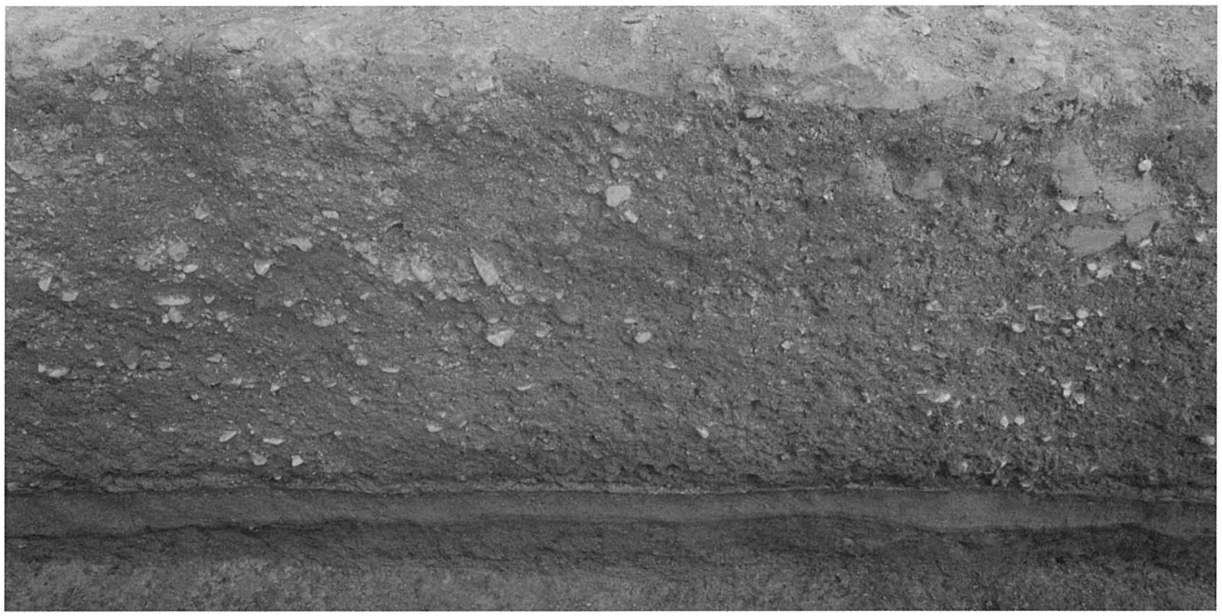


下部葺石検出状況（北より）

図版五



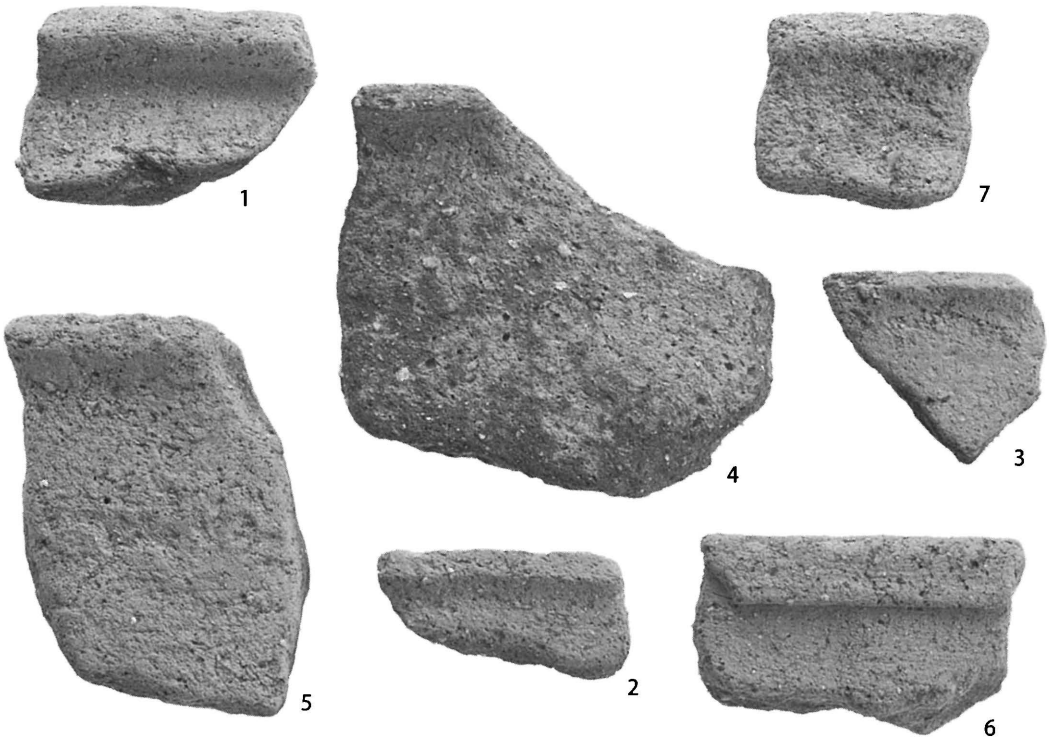
EW断面（北より）



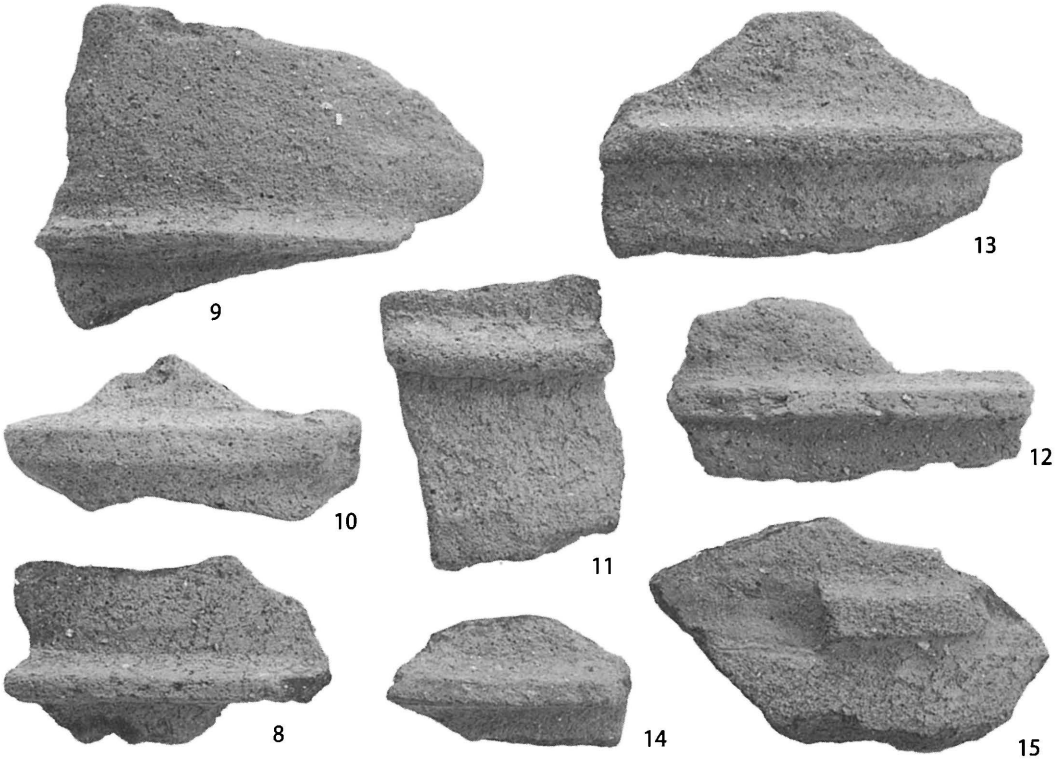
NS断面（西より）

葺石断面及び墳丘断ち割り（東より）

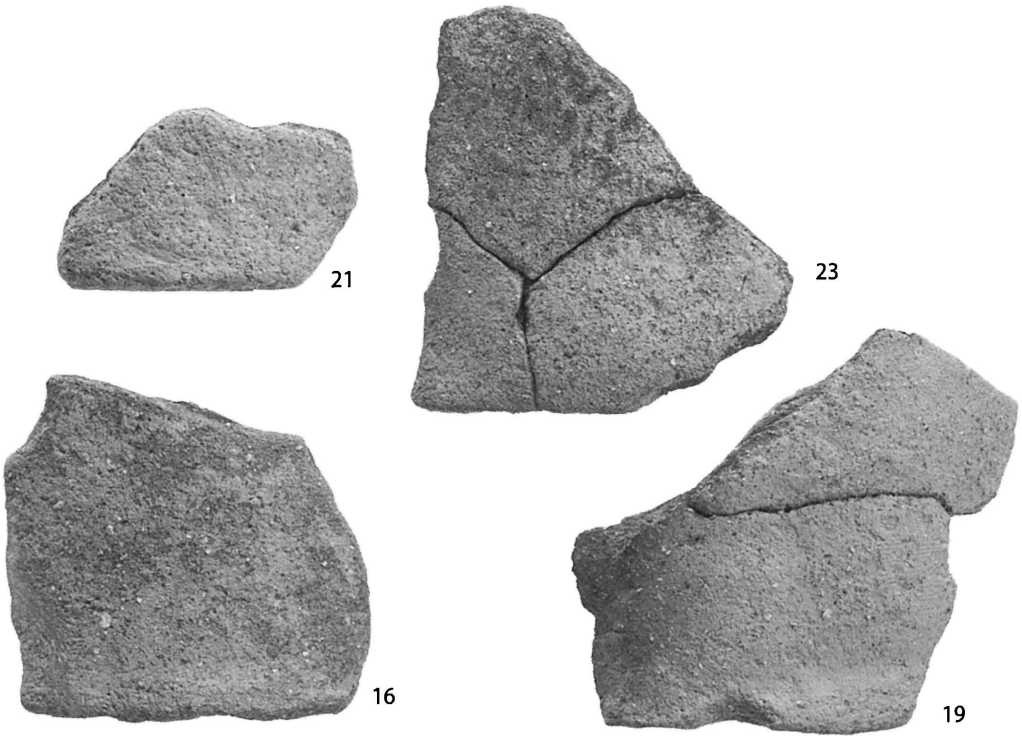
図版六



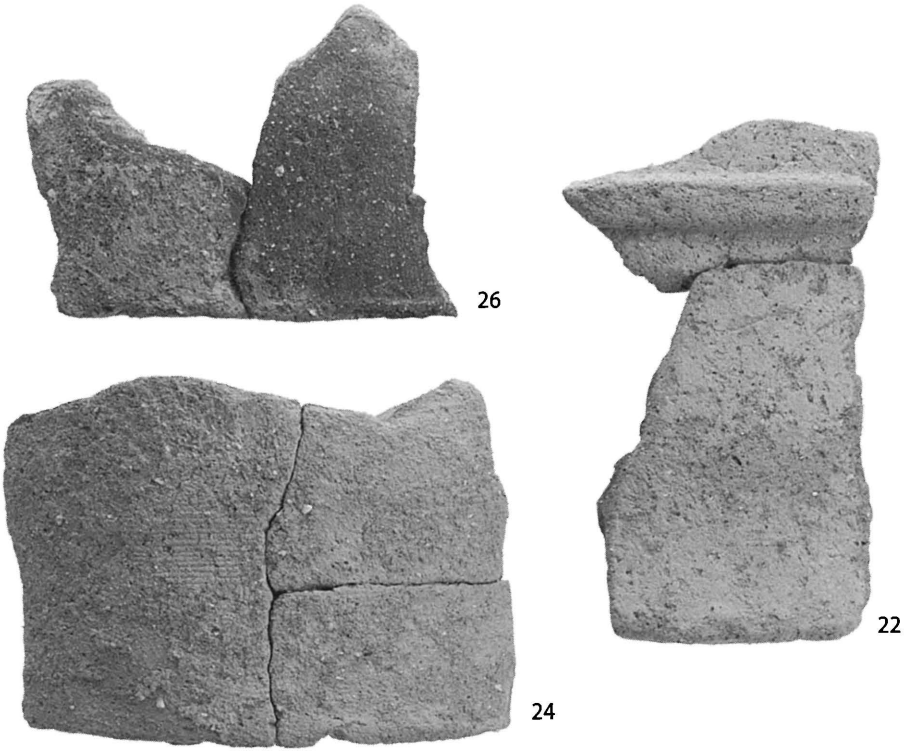
出土円筒埴輪（口縁部）



出土円筒埴輪（体部）



出土円筒埴輪（底部）

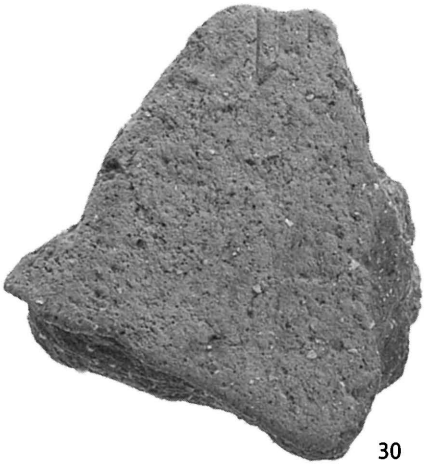


出土円筒埴輪（底部）

図版八

20

出土円筒埴輪



30

28

29

出土形象埴輪